

廣島市の人口

西 龜 正 夫

人口増加の趨勢

人口の都市集中といふことは世界を通じての著しい現象で、わが國でも亦近年殊にやましく言はれる様になつた。そこで少しく廣島市の人口について觀察して見たい。

毛利輝元の築城以前は五箇莊といふ寂しい農村に過ぎなかつた。従つて天正十九年輝元入城の時が先づ廣島の誕生と云つてよい。その頃の人口が果して何程であつたかは信ずべき文献が無いが、當時毛利氏は山陰山陽九箇國を統治する大領主であつたから、その家臣頗る多く、家中町の區域の廣大であつたことは後世福島氏や淺野氏時代の比では無かつた。故に商工人口よりも食祿人口の方が却つて多かつた位ではない

かと思はれる。

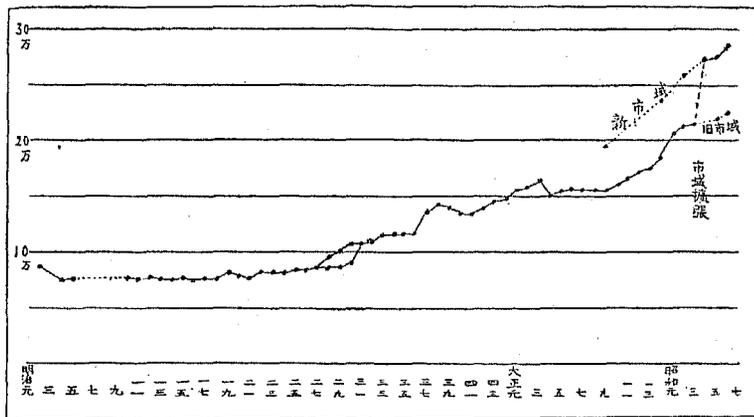
その後の戸口に就て文献を探つて次に掲載する。

時代	戸數	人口	備考
福島時代末期	△四、〇五六	?	年間録所載
寛永二年	△五、七四六	?	同
寛文三年	一、三五〇	?	藝備國郡志所載
〔食祿家〕 〔農工商〕	三、五〇四	?	同
延寶五年	〇四、三八九	三八、五九一	尙古所載
正徳五年	〇四、八五一	五六、〇〇八	市史所載
寶曆十年	×	二七、九八七	新開地を含まず大年寄用場日録所載
明和五年	×	二八、六九三	同前
安永六年	×	二七、五七七	同前
文政年間	六、五四五	四九、二四八	藝藩通誌所載
明治二年	?〔農工商〕 〔諸士以下〕	五〇、〇二三 三八、五八四	保田家古文書所載

明治四年 一七、六七二 七二、七五一 日注雜記所載

右の中△印は町家のみか食祿家をも含むのか明瞭でないが、その後のものと比較して見ると食祿家をも含んでゐる様である。○印は明かに農工商家とあるから食祿家は含んでゐない。而して寛文三年の數字と比較して見ると、人口増加の相當に著しいものがある。即ち寛文三年から延寶五年まで十四年間の増加率は三六%であり、延寶五年から正徳五年まで三十八年間の増加率は 四五・三%である。×印は新開地を含まないから比較が困難であるが、正徳五年の數字では町分三七・一五五に對して新開分一八・八五三であるから、假りに町も新開も同率で増減したものとするとこの六十年間には人口は著しく減少してゐることになる。

併し文政年間の人口は町分二六・二五五 新開分二三・四九三になつてゐて、町の人口の減少に反して新開人口は増加し、兩者の比は六六對三四から五三對四七になつてゐるから、全人口の



第一圖 人口増減表

減少はさほど著しくなかつたかも知れない。食祿家について寛文三年にその戸數が出てゐるだけでは悉く省いてあるから、その人口は一寸見當がつか兼ねるが、元

和五年淺野氏入國の時の記録によると士卒以下千四百三十人とあり、その後の調では家中の總人數は陪臣を除いて定員八千人、實數六六八〇人となつてゐる。又明治二年の記録では諸士諸足輕諸隊の者共三二、五八一御家中召遣の者共五、一六九とあるから、その間どう變化したのかわからぬが、著しい増加は争はれない。

これを要するに明治以前の數字は、極めて不完全且不正確であるから、その真相を捉むことが容易でないが、その後の形勢は第一圖に示す如く、廢藩後一時激減してから、約二十年間は殆ど増減なく、明瞭なる停頓時代を表はし、明治二十二年以後始めて僅かに増加の形勢を示すに至つた。蓋し明治二十二年は市制施行の年であり、翌二十三年には宇品築港が完成したのでこの頃から都市としての機能を發揮するに至つたものであらう。而して眞に都市的增加を見るに至つたのは三十年以後である。

廣島は戦争で太つたとよく云はれる。成るほ

ど明治三十六年から三十八年までの二年間に二一・四%を増加してゐるから一應は驚かざるを得ない。併しその後の二年間には漸減してゐるので、結局三十五年から四十年までの増加率はそれ以前の五年間よりは少いといふことになつてゐる。日清戦役の時の人口には二様の統計があつて何れが正しいか不明であるが、一方の統計では二十八年から稍増加が著しくなつてゐる。

明治の末年から大正へかけては可成り急速な増加を見たが、大正四年以後暫く停頓し、十年以後更に一層急激に増加した。昭和四年には接續七ヶ町村の合併があつたが、その前後を各新市域と舊市域とに分つて比較して見ると、昭和二年以後の舊市域の増加は稍緩慢で、郊外町村の發展が特に著しくなつたことが頷かれるのである。

人口増加の原因

かゝる増加の原因が何によるかを少しく検討

して見よう。大正十一年以後昭和六年に至る十年間の現住人毎年の出生率は最多三・六最小二・七、平均三・一であり、死亡率は最多二・三最小一・五、平均一・九、その差即ち自然増加は平均一・二となつてゐて、全國平均の一・四五に比べると著しく少い。して見るとどうしても他からの流入による社會的増加が著しいものと見なければならぬ。

寄留簿によつて調べて見ると昭和六年末に於て

本籍人口	二二五、九八七	市内	一七二、八九八
		縣内	六、八〇六
		他郡市	二四、四二三
		寄留	二一、八六〇
		その他	
本籍外人口	一一六、〇八〇	縣内	六五、三〇三
		他郡市	五〇、七七七
		より	

即ち本籍人口百人中二十二人は市外に出て行つてゐるが、その代りこれに二・二倍の人口が他地方から流入してゐるのである。

これを附近の農村に比べて見ると著しい違ひである。今代表的なもの二三を掲出すると、

山間部	甲奴郡吉野村	〔本籍人口〕	二、三一九
		〔現住人口〕	二、三二五
平野部	安佐郡祇園村	〔本籍人口〕	三、一六七
		〔現住人口〕	二、六八一
島嶼部	佐伯郡沖村	〔本籍人口〕	六、一六二
		〔現住人口〕	三、四五〇

かくの如く農村は殆ど例外なしに本籍人口が現住人口よりも多い。多少他町村からの入寄留もあるが、夥しい出寄留者が無ければこんなことにはならぬ。本籍は任意に移すことも出来るけれども、都會の人が態々田舎へ本籍を移すといふ様な場合は少い。反對に田舎の人が都會へ本籍を移すことは多い。田舎は概して傳統を重んじ、幾分排他的であるのが普通だからである。更に出生地別の人口を見ると(昭和五年)

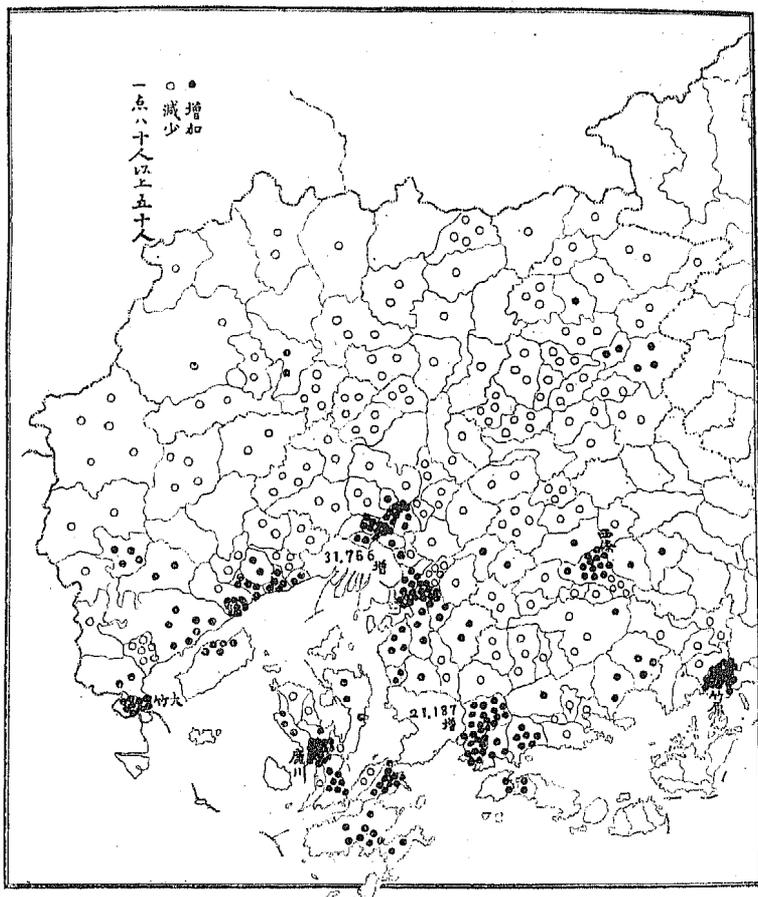
市	内	一三〇、七四九
他郡市		七七、六六七
他府縣		五六、〇六三

即ち市内の出生者は總人口の四九・二%に過ぎないが、縣全體を見ると六〇%で、前掲の村に就て見ると吉野村は七二%、祇園村は六五・二

%、沖村は八
 七%である。
 祇園村が比較
 的少いののは、
 移民村である
 ため、米國生
 れの子供で教
 育の關係上歸
 村してゐるも
 のが多いから
 である。
 更に出生地
 を年齢別に見
 ると

第二圖 五年間人口變動

(自大正十四年至昭和五年)



年 齡	市内出生	市外出生	市内出生者の割合%
十歳以下	四五、五〇八	一二、八〇七	七八・一
二十歳以下	二九、五五四	三一、二九三	四八・六
三十歳以下	一七、五〇五	三〇、九三九	三七・七
四十歳以下	一一、六四五	二二、一七三	三四・三
五十歳以下	九、五九〇	一六、二七一	三七・〇
五十歳以上	一六、九四七	二〇、二五六	四五・五
計	一三〇、七四九	一三三、七三〇	四九・二

即ち十歳以下は大部分が市内出生者であり、二十歳以下及び五十歳以上のものは稍平均の割合に近いが、二十一歳以上五十歳以下の主要生産年齢にあつては、僅々三割餘が市内出生者であるに過ぎない。以て如何に働く人の流入が多いかとわかる。これ全く都市の特質の然らしむる所であり、人口の向都離村現象とはかゝるものであると考へられる。

然らばその増加人口は、果してどれだけ範圍から集つたものか、換言すれば市の人口培養域如何といふ問題であるが、遺憾ながら市外出生者の各町村別數が判明しないので、正確に知

ることが出来ない。そこで已むなく大正十四年から昭和五年までの五年間に於ける市附近各町村人口の増減を圖示して見た(第二圖)。これによると廣島市及び吳市の接續町村のみは増加してゐるがその他は概ね減少で、ただ西條・竹原の二町が地方的小都市として、大竹が岩國に於ける人絹工場設置の影響、鹿川が海軍關係土工のために稍々人口の増加を見てゐるのみである。

この農村に於ける人口減少が、悉く廣島乃至吳市への集中であるとは考へられない。それは主要各村について實地に調べて見ても、廣島市よりは寧ろ阪神方面や北九州に出てゐるものが多く、又廣島の四近にあつては外國への出稼が非常に多いのである。併しその若干が廣島市への流入であることは否定することが出来ぬ。

人口増加の地域

都市の人口がその周縁部に於て著しく増加し中心部に於ては却つて減少の傾向あることは一

第四圖 廣 島 市

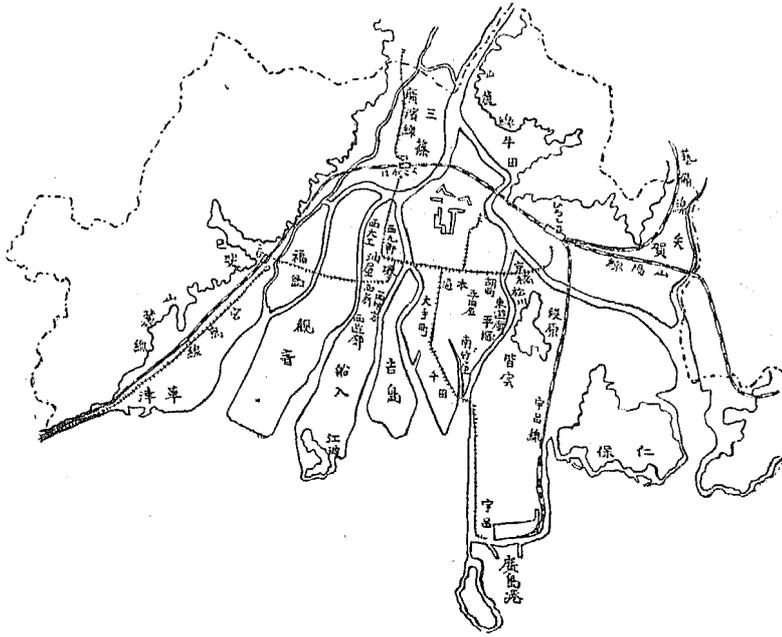
地 球

第二十二卷

第三號

一三

三八



更に別の方面から見て、本籍人口と現住人口とを比較して見ると、皆實・千田・吉島・福島の各町は現在人口が本籍人口の二倍を超え、最も外來者の多い部分であることを示し、松川・胡平田屋・西九軒・油屋・西大工・西地方・西新・堺町等市の中央部は何れも現住人口が本籍人口よりも少いか又は極めて僅かに多く、人口の流出著しきを示してゐる。たゞ仁保・草津・矢賀等の接續町村が本籍人口よりも現住人口の少いのは、市に接續しない純農漁村たりし時代に於て已に人口過剩に陥り、盛に海外に移住したといふ特殊の事情があるからであつて、近時市の發展につれて人口が著しく増加してゐるにも拘らず、まだ本籍人口數に達しないのである(第四圖参照)。

次に晝間人口と夜間人口とがどう違つてゐるかは、未だ調査されたことが無い

ので不明であるが、銀行・會社・官衙・學校・工場等の位置、大商店街や歡樂街の配置等から考へ、又各交通機關并に道路の交通状態等を見ると、都市の中心部と周邊部との間に於ける求心的及遠心的移動の一日を周期とする振動が相當に多いことを察することが出来る。

これを電車の乗客について見ると、昭和六年中に於ける一日平均の乗客数は六二、八〇一人であり、バスの乗客は同じく一〇、一三五人である。この中の半數が定期的に市内を往復するものと假定し、一人が往復二回宛乗車するとすれば一萬八千人が定期振動人口となる。これに徒歩によるものが同數若くはそれ以上あるものと考へられるから約三四萬の振動量であらう。

一面勞働調査の結果によると、昭和五年に於ける市内勞働者の總數は六千六百人であり、中等學校の生徒數は一萬三千八百、専門學校及び大學の學生數は二千三百で、無論その中には校内の寄宿舎にあるものもあり、市外がらの通學

者もあるが、市内に於て往復するもの一萬を超えることは確かである。これに官公吏約五千を加へると總計二萬餘になる。會社銀行員、店員その他は統計がないが、これ亦五千以上に上るものと思はれるから、前記の數字と大略一致する様である。

人口の定時増減

更に周圍の町村との間に行はれる人口の振動について、各町村役場に紹介して得た結果から見ると次の様になる。尤も回答未着の町村もあるので、それ等はその町村の知人に尋ねたり、又汽車や電車の定期券發賣數等から推算した。

西部 山陽線及び宮島線方面

七八九人

北部 廣濱線及び藝備線方面

八九三

東部及東南部 山陽線吳線方面

三・七二三

南部 島嶼方面

一二六

勿論これは交通の全員ではなくて、通學・通勤・行商等のために毎日さまつて往復する人數を計上したのである。若し市に出入する人員の全部を計上するとしたら、もつと莫大な數字が

出よう。それは統計が得られないが、鐵道三驛の乗降客數は一日平均各七千七百餘、宮島線は六千二百、廣濱線二千二百、宇品港乗降船客數一日平均各千百、この外に徒歩・自轉車・郊外乗合自動車等によるもの、及び發動機船によつて各河川の上陸場に發着するものを合計したら、恐らく三萬近くの人が毎日市に出入することゝなるであらう。

ところで定期往復數を四つの方面に分つて見た時、東部及び東南部が目立つて多いのに氣付く。これは主として市の東郊町村に於ける通學通勤者が多いからであつて、府中村は七百八十五人、海田市町は八百七十七人、船越村四百九十七人となつてゐる。然るに北部や西部の町村にあつては、一町村百人を越えるものは殆ど無いといふ様である。

これは如何なる理由であるか、輕々に論斷するわけに行かないが、市の工場區域が著しく東部に偏してゐることが一原因であると考へられ

る。市の地盤は大體に於て西部に隆起東部に沈降の傾向があつて、西部の川は満潮時にもみ水を見る潤れ川であるが、東部の川は何れも水が深く舟運の便が大であるから、これが東部に工場が多くなつた主因をなしてゐる。

市の西郊は山直ちに海に迫つて狹長な平野を存するに過ぎないが、土地が高燥で風景もよから別荘及び高級住宅地帯となつて居り中級以下の勞務者の居住するものが少い。北郊は太田川筋の洪瀨平野で、市に對する野菜の供給地となつて居り、純農村たるの色彩が強い。然るに東郊は中級以下の住宅地帯となつて居て、その聚落景觀にも著しい特徴が見られる。これによつて見ると、府中・船越・海田市等の諸町村が、廣島市に合併の時期も亦決して遠くないのではあるまいか。

人口振動の最大振幅はどれほどであるかを汽車定期券發賣數によつて調べて見ると、東は本郷驛で廣島驛から六一籽九、西は田布施驛で己

斐驛から七十五軒二である。田布施・己斐間の定期乗車人員は二人に過ぎないが、その所要時間は殆ど二時間に近いから、これ等は極めて特殊の事情にあるものと思はれる。グラフを作つて見て急増點を調べると、東は西條(七五人)西は大竹(一〇七人)である。西條・廣島間は三一・八軒で所要時間は下り四十五分、上り一時十分内外、大竹・己斐間は三〇・六軒で上下共四十五分内外である。

次に北は廣濱線によるものは可部が終點であるが、距離十三軒八で時間は三十分、藝備線によるものは中三田が急増點で二十五軒、一時間、又南は吳線の終點吳驛との間に三百二十九人の定期乗車があつて、廣島までの距離二六・四軒、時間は五十分内外である。又南方島嶼部方面は發動機船によつて宇品から四五十分の地點が通勤限界となつてゐる。

これによつて見ると、市の周縁から中心部までの交通所要時間を十分と見て、大體市の中心

から一時間の地點が通勤限界線と見てよい様で、これは他の都市に於けるものと大差ないやうである。

定期乗車人員表	
廣島以西各驛より己斐驛まで	二九七
廣島以東各驛より廣島驛まで	一、三七一
廣島以西各驛より廣島驛まで	一九六
吳線各驛より廣島驛まで	六五三
宮島線電車各驛より西廣島驛まで	四一三

人口増加の質的觀察

増加した人口を質的に見て、どんな種類の人が増加したのであるかを明かにしたい。先づこれを年齢の上から見ると、大正九年及び十四年の國勢調査の結果は、

	大正九年	大正十四年
一四歳以下	五一、一五八	六一、一三二
一五—五九歳	九八、三五八	一二三、二五一
六〇歳以上	一〇、九九四	一一、三四八

而してその生産年齢の全體に對する割合は大正九年六一・一%、大正十四年六一・八%となつてゐる。昭和五年には接續町村の合併があつたか

ら、そのまゝでは前者と比較することが出来な
いが、兎に角壯年者の増加が著しいことは争は
れない。大正九年及び十四年の數字にその接續
町村を加算して比較すると、この傾向は一層著
しいのである。

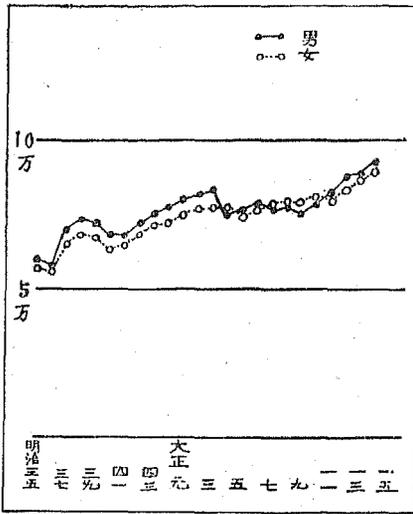
これを縣下の農山漁村について見ると、生産
年齢が總數の六〇%に達するものは殆んど絶無
で、五〇%に足らないものが六七割を占め、平
均四九%内外となつてゐる。全國の村落のみの
平均は不明であるが、都市をも含めたものは五
四・六%となつてゐるから、村落が五〇%内外と
なり、都市が六〇%以上となるのは全國的の傾
向であるかと思はれる。無論當地方の農村は海
外移住者が多く、それ等が學齡兒童のみを歸國
せしめる風習も盛であるから生産年齢が異常に
低下してゐる點もあらう。が兎に角都市の人口
増加は壯年者の流入によるものであることは確
かである。

次に職業別人口を見ると(不就業者を省
き副業を含む)

職業	昭和四年	同五年	同六年	増減指數	増減歩合
農業	一三,〇二一	一四,五四一	一五,〇六八	一〇〇・〇	一九%
水産業	六,一六四	三,〇七五	三,〇五三	五〇・八	△一九
鑛業	二〇七	二〇九	二〇一	一〇〇	一
工業	一〇,〇四二	二〇,五九七	三三,〇八四	一三三・〇	二六
商業	三三,五三三	六六,〇三〇	四〇,〇〇九	一〇〇	三
交通業	六,〇六六	七,六九五	九,四四五	一五五・〇	二五
公務員山業	二,六六八	一〇,七四二	一三,〇三三	一〇七・五	八
其他の業	一六,三三九	一〇,四三三	三,一六二	七五・〇	△三〇
無職業	三三,六三三	一〇,七三三	二,一七九	九一・四	八
計	一六,九四三	二五,一〇〇	一四,六五五	一〇〇・〇	一〇〇

即ち實數から云へば商業の増加最も著しくて
二年間に一萬四百五十六人を増し、次で工業三
千八百餘、交通業三千三百餘を増してゐるし、指
數から云へば鑛業が最も著しく、交通業・商業・
農業がこれに次でゐる。而して水産業は最も甚
しく減少して殆ど半數となり、實數では其他の
業者が四千人餘を減じてゐる。これによつて見
ると本市の人口増加は主として商工業者の増加
によるものと概言することが出来る。これ都市
の機能上まことに當然のことである。

第五圖 人口増減性別比較



に超過することが特に甚しいのである。即ち第五圖に於て見る様に、増加に際しては男子の増加は女子よりも著しく、減少に際しても亦男子は女子より著しい。その結果男子の増減の振幅は、女子増減の振幅よりも著しく大であるといふことになる。これは寄留人口について見ても、

出寄留・入寄留共に男子は女子よりも著しく多いのである。随つて又本籍人口は男女の差が少いのに、現住人口にあつては甚しい差があるといふことになつてゐる。

最後に年齢と性との相關について見ると、第六圖の如く十歳以下は男女殆ど同數であるが、

十一歳以上二十歳以下に於て男子が著しく多く三十歳以上に於ても亦男子が多いが五十歳以上になると概して女子の方が多くなつてゐる。概言すれば生産年齢に於て男子が多いので、人類活動の舞臺としての都市の特色を示してゐると云へるが、二十歳以下に於て特に男子の多いのは、高等専門諸學校の存在が大に關係してゐることと思はれる。

本稿を草するにあつて貴重な材料を提供せられたる廣島市及び附近各町村當局、廣島運輸部、電軌會社その他關係各方面の方々に對して感謝の意を表する。